

# 妊娠中絶論の展開：「価値ある将来」の議論を中心に

江口聡\*

2008/10/25

医学哲学・倫理学会大会  
北海道大学

- 国内の「生命倫理」の入門書では、妊娠中絶の議論に関して、J. J. トムソンの自分の身体への女性の権利の議論 (Thomson, 1971) と M. トゥーリーの権利の分析 (国内では「パーソン論」と呼ばれることが多い) (Tooley, 1972) が紹介されることが多い。どちらもエポックメイキングな議論ではあるが、どちらも徹底的な批判にされされ、重大な欠点があることが判明しており、もはやそのままでは中絶の正当化の議論としては（まったく？）説得力を失っているように見える\*<sup>1</sup>。
- また国内では、米国の保守派（中絶規制派）は宗教的右派と報道されることが多いが正確ではないように思われる。たしかに宗教色の強い「生命の神聖性」や「尊厳」の議論が、非宗教的な人々に対してはあまり効果がないことは広く認められている。しかし、非宗教的・哲学的な反中絶の議論にも重要なものがある。1990 年前後に特に重要な論文が 2 本出ている。D. マーキスの「我々と同じ価値ある将来」の議論 (Marquis, 1989) と R. ハーストハウスの徳倫理学の議論 (Hursthouse, 1990) である\*<sup>2</sup>。特にマーキスの議論は 90 年代以降、非宗教的・哲学的な中絶反対の議論の代表とみなされている。彼の議論は 90 年代以降保守派が勢力をとりもどした一因であり、またリベラル派が理論を哲学的に複雑化・精密化しなければならなくなった\*<sup>3</sup> 圧力となっていると思われる。

## 1 「パーソン論」の魅力と難点

1. 妊娠中絶を道徳的に正当化しようとする議論を大別すると、(1) トムソンのように女性の権利と胎児の権利を葛藤するものとみなし、女性の権利が優先することを主張しようとするもの、(2) トゥーリーや M. A. ウォレンのように「ひと」の概念を分析することによって、胎児はわれわれ成人ほどの道徳的地位はもっていないことを示唆・論証しようとするもの、(3) 功利主義的な効用計算によるもの、の三種になる。
2. 「ひと」を「生存する権利をもつ存在者」と定義しようが、「自己意識、推論能力、言語能力などを持つ存在」と定義しようが、とにかく「潜在的な「ひと」」が「ひと」と同じ権利をもつと主張すること（**潜在性の議論**）は難しい。トムソン (Thomson, 1971) の表現を使えば、「ドングリが椗の木に成長するこ

---

\* 京都女子大学現代社会学部准教授、eguchi@kyoto-wu.ac.jp

\*<sup>1</sup> だが、もはや思想史的な価値しかないと考えるのは性急だろう。

\*<sup>2</sup> ハーストハウスの議論については中澤 (2001) が紹介している。

\*<sup>3</sup> その成果の代表は、McMahan (2002) と Boonin (2003) だろう。どちらもかなりの大部である。

とを根拠にドングリは樫の木であるとは言えないし、そう考えるべきだとも言えない」。チャールズ皇太子は潜在的な英国国王だが、まだ国王の権利はもっていない。この潜在性の議論を否定する論点は広く認められている。

3. ムソンらによる女性の自分の身体に対する権利の議論の最大の難点は、(レイプによる妊娠のような極端な場合を除けば) 胎児も母親の身体を用いる(道徳的)権利を持っていると主張することは十分可能に見えることである。胎児にはその権利はないと主張することは論点先取になってしまう。
4. 一方、M. トゥーリーの議論の最大の難点はおそらく、「生きづける権利をもつ」ためには「自分が持続的存在であるという自己意識をもつ必要がある」という条件は必要ないように見えることである。
5. トゥーリーよりもむしろ M. A. ウォレン (Warren, 1973) の方が典型的な「パーソン論」の議論として有望である。彼女はトゥーリーのように「ひと」であることに「経験やその他の心的状態の持続的主体としての自己についての観念を備えており、なおかつ、その個体が自分そのような持続的実体であると信じている」といった厳しい要件は求めない。道徳的に配慮されるには、人間に特徴的ななんらかの心的特徴のクラスター(意識、感覚など)があるだろうと指摘するにとどまる。
6. ウォレンらの議論のポイントは、「人間(の胎児)を特別扱いする理由はなにか」「特に動物との違いは何か」という問いにある。もし人間と動物の生命の価値に違いがあるならば、それはおそらく心的な機能・能力によると考えざるをえない。さもなければあらかじめ人間以外の動物の生命は人間よりも価値がないと根拠なく前提してしまう「種差別」におちいる。(←国内ではこの点が十分意識されていないので注意)
7. **昏睡問題**、心理的動揺問題、洗脳問題。我々は意識を失ったり、情動的に混乱していたり、洗脳などによって本来自分が望むもの、望むべきものを望まないことがある。その場合も道徳的配慮の対象でありつづけ、もっている権利を失なわないのはなぜか。たとえばトゥーリーなどは天下のような下りの条件をつけるに留まり、なぜこのような条件が付けられるのかを十分に説明することは難しいことを認める。

ある人のXに対する権利が侵害されうるのは、その人物がXを欲求している場合だけでなく、以下の条件がなければその人は現在Xを欲求していたであろうといえる場合も含む。その条件とは、(i) その人物が情動的な均衡を失なった状態にある、(ii) その人物が現在意識を失っている、(iii) その人物はXの欠如を欲求するよう条件づけられている、というものである。(Tooley, 1972)
8. 上の条件は一件自明に見える。しかし、昏睡状態でも権利を維持しつづけるのは、将来覚醒し意識をもつようになるからなのであれば、胎児も将来意識を持つようになるのだから、同じ扱いをするべきということになりそうである。実は難問。

## 2 マーキスの「われわれと同じ将来」の議論

Don Marquis の 1989 年の論文は、上述のような「パーソン論」の弱点をつき、説得的な仕方でも中絶反対の議論を成立させた。

### 2.1 骨組

1. 殺人が不正であるのは、被害者から我々と同じく価値ある将来を奪うためである。

われわれは次のようなわれわれ自身にかかわる疑いのない前提から始めることができる。すなわち、〈私たち

を殺すことは不正である」という主張である。・・・命を失うことは、その人が被る最大の損害の一つである。命を失うことは、殺されなければその人の将来を構成していたかもしれない経験、活動、計画、楽しみすべてをその人から奪い去ってしまう。・・・とはいえ、この点を「生命の損失」として記述してしまえば誤解を招く恐れがある。私の生物学的状態の変化それ自体が、私を殺されることを不正にするわけではない。私の生物学的生命が失われる結果、殺されなければ将来の私の個人的生活を構成していたかもしれない活動、計画、楽しみ、これらすべてを私は失ってしまい、したがって、私が死ねば、私の将来に関する価値がすべて奪われてしまう。突き詰めると、こうした損失を私に与えることが、私を殺すことを不正にする点なのである。そういうわけで、〈他に特段の理由がなければ (*prima facie*)、成人したどの人間を殺すこともきわめて不正である〉とするのは、その人の将来の損失であるように思われる。

## 2. 胎児もわれわれと同じ価値ある将来 (future-like-ours) をもっている。

〈殺すことが一般に不正なのは、第一義的には、その被害者が自分の将来の価値を失うからである〉という主張は、中絶の倫理に対し疑う余地のない帰結をもたらす。標準的な胎児の将来には、成人の将来と同一であり、幼児の将来とも同一であるような一連の経験、計画、活動などが含まれる。誕生後の人間を殺すのが不正なのはなぜかを説明するのに十分な理由は、胎児にもまた当てはまるような理由である。このため、〈他に特段の理由がなければ、中絶は道徳的にきわめて不正である〉という結論になる。

## 3. それゆえ、胎児を殺すことは我々を殺すことと同じくらい重大な不正である。

## 2.2 特徴

1. パワフルな保守的議論。シンプルで我々の多くの道徳的直観と整合的。「もしわれわれを殺すことが不正なのは将来を奪うからであるならば、胎児も我々と同じ将来をもっているのだから、胎児を殺すことも同じく不正である。」
2. 昔ながらの「潜在性の議論」との違い。従来の潜在性の議論は、胎児の時点で生きる権利をもつか否か、「ひと」であるか否かにかかわる議論だった。たしかにある時点  $t$  で特性  $P$  を持つかどうかは、将来の時点  $t'$  で特性  $P$  をもつかどうかには依存しない。したがって、胎児が将来5歳児になるとしても、胎児は5歳児と同じ権利は持たない、というものであった。しかし、「われわれと同じ将来」をもつかどうかという点では、胎児と5歳児にたいして大きな違いはない。このようにマーキスの議論は、「ドングリはまだ樫の木ではない」反論を避けている。
3. 「パーソン論」がぶつかった昏睡状態問題、自殺願望者問題などを回避。昏睡していようが精神的に動揺していようが洗脳されていようが、もしその人に我々と同じように価値ある将来があるのであれば、その人を死なせることは我々を死なせるのと同じように不正であるといえる。
4. もし意識を重視する論者が、「昏睡状態の患者も権利を失わないのは、将来意識をとりもどしたときのその患者の欲求（や快）が重要だからだ」と答えるならば、胎児も将来欲求や快をもつことになるのだから、同様に扱うべきであるということになる。
5. 動物の問題を回避。たとえば大型類人猿の一部は我々とよく似ており、われわれとほぼ同じように価値ある将来をもっているかもしれない。もしそうならば、大型類人猿を殺すことは我々を殺すのと同じくらい不正かもしれない。一方、貝類や魚類などは「生きている」点を超えては、われわれと同じような将来をもっているわけではないので、殺すことはそれほど不正ではないかもしれない。このようにしてマーキスの議論は（とにかく）種差別的でない。
6. 重度障害児や末期患者の治療停止を正当化する可能性がある。苦痛に苦しむ末期の患者はもはや我々と同じように価値ある将来はもっていないかもしれない。このような場合にその患者を死なせること

は我々を死なせるほどは不正ではないかもしれない。重度障害を負った新生児も同様。(← これは「短所」と見る人々もいるだろう。)

7. 胎児の潜在性・可能性に注目していた国内の論者も少なくない。ただし、マーキスのような論証手順を踏んでいるものは見つからない。単に「将来がある」と主張するのではなく、「我々を殺すことが不正なのは我々から将来を奪うからだ」という段階を踏んでいるのがマーキスの議論のポイントである。

### 3 検討

意外にもこれほどシンプルなマーキスの議論を論駁するのは難しい。反駁の方法としてありえるのは、(1) マーキス以外の方法でひとを殺すことが不正である理由を説明する、(2) 胎児と我々は同じ将来をもっているわけではないことを論証する、のどちらかだろう。

#### 3.1 殺すことの不正さ

1. 「なぜひとを殺すことは不正なのか」にマーキスの議論とは別の形で答えるのは意外に難しい。これを理解するためには、マーキスと古典的功利主義・選好功利主義との立場の違いを理解する必要がある。
2. マーキス自身の説明にあげられる「将来」は実際には、経験(experience)、活動(activities)、計画(preject)、楽しみ(enjoyment)など非常に幅広いものである。「価値ある将来」には、おそらく、我々自身が価値があるとみなすものならなんでも含まれることになる。
3. ピーター・シンガーは『実践の倫理』の第4章「殺すことのどこが不正なのか」で不正さの説明として「古典的功利主義」「選好功利主義」「(トゥーリー流の)権利論」「自律の尊重」の四つを挙げているが、それぞれ問題が残ることを自覚している。(Singer, 1993; 櫻, 2006)
4. 快苦の量だけを問題にする古典的功利主義をとった場合、我々を死なせることが不正なのは、それが結果として快樂の量を減らすから理由以外にありえない<sup>\*4</sup>。したがって、我々を死なせることに見合いそれを超えるような快や幸福を作り出すことができれば殺すことは正当化される。ただし、われわれが恣意的に殺されるといったことが一般的に知られれば、我々の感じる不安や恐怖は莫大であろうという間接的な根拠もあるにせよ、それに見合う効用があればよい、あるいは、苦痛なく殺すのであれば許されるとする功利主義的発想を受け入れられないと考える人が大半だろう。
5. また、古典的功利主義的立場をとる場合、より多くの幸福な感受性ある生物が生きていることはよりよいことになるはずであり、したがって、世界にはより多くの人間がいる方が(他の条件が同じならば)望ましいということになるはずである。それゆえ、(他の条件が同じならば)人口調整や避妊は望ましいことではなく、可能であればより多くの子どもを作る義務がわれわれにあるということになるかもしれない。これは功利主義者でさえも受け入れたいと感じる結論である。
6. それゆえ、古典的功利主義のように各時点での快苦のみを考慮するよりは、将来に対する欲求を重視する立場の方が望ましいように見える(選好功利主義はその典型)。しかしここで、二種類の解釈が可能である。道徳的評価を行なう場合、現に存在している欲求の満足や挫折のみを考慮すべきなのか、将

---

<sup>\*4</sup> 「古典的功利主義に従えば、人々が死ぬとに未来への欲求が満たされなままに終わるという事実はなんら直接の重要性は存在しない。もしあなたが即死とするならば、あなたが未来にたいして欲求を持っていたかどうかということは、あなたが経験する快樂あるいは苦痛の量になんの影響も与えない。それゆえ、古典的功利主義者にとっては、「人格」の地位は、殺すことが不正であることは直接には無関係である。」(Singer, 1993, 邦訳 pp. 109-110)

来存在するであろう欲求をも考慮するのか、である。

7. 道徳的判断にあたって、現に存在している欲求のみを考慮するのであれば、胎児はまだほとんど欲求をもっていないので、ほとんど配慮する必要はないことになる。これがシンガーの基本的な立場である。しかしこの立場は、その現実の欲求さえ消してしまえば欲求を挫折されることには問題はないという立場に近づくことになる点で古典功利主義と似ている。たとえば一時的に絶望した若者を自殺するにまかせることはそれほど不正ではない、とされてしまうかもしれない。
8. したがって、マーキス自身は将来の欲求もまた考慮されるべきであると考え。胎児は将来それ自身が価値あるとみなすような将来を楽しむことになるのだから、そうした将来の欲求も考慮に入れる必要があるということになる。
9. ブーニン (Boonin, 2003) は、欲求をもたない初期の胎児が将来をもつとしても、まだ欲求はもっていないので、その将来はその胎児にとってまだ「価値ある」ものではないと反駁しようとしている。
10. ここにあるのは、我々は価値があるものを欲求するのか、欲求するものからその欲求の対象に価値があるのかという難問である。マーキスは我々は価値があるから生を欲求するのであると考えるのに対し、ブーニンはわれわれは生を欲求するから生に価値があるのだとする。私自身はブーニンの立場に魅力を感じるが、これを主張するには上の自殺志願の若者の問題をうまく解決する必要がある。

### 3.2 避妊と同一性

1. 我々が「将来を持つ」ことと、「胎児が将来を持つ」ことのあいだには違いがあるのではないかという疑念がある。「将来をもつ」ということに曖昧さがあることに気づかされる。「将来をもつ」ために重要なのは、ある物理的継続性であるのか、心理的な継続性なのか、というパーフィットらがとりあげた難問に答える必要がある。
2. ノークロス (Norcross, 1990) は、卵子や精子も、胎児や同じように我々と同じ価値ある将来をもっていると言えないのかと問う。もし同じような価値ある将来をもっていると言えるのなら、マーキスの説明では、避妊も殺人と同じ程度に不正であることになる。
3. マーキス自身は、次のように述べる。

避妊が行われる時点では、何億もの精子と（排卵された）一つの卵子が存在するのであって、これらが組み合わせる可能性は何億通りもある。〔避妊が行なわれる時点においては〕現実の組み合わせはまったく存在しない。将来を奪われる対象となるものは、単なる組み合わせの可能性なのだろうか。そうだとすれば、どちらの組み合わせなのだろうか。
4. この答はかなりトリッキーである。マーキスは、将来を持つためには物理的継続性が重要であるとした上で、一定の精子と卵子が結合した接合子は卵子だけとは違う存在論的地位を持つと主張したいように見える。その存在論的地位の差が「特定の遺伝子の構成」以外の何であるのかがよくわからない。特定の遺伝子の構成がなぜそのような重要なのだろうか。
5. これは「将来を持つ」ということにまつわる難問である。いったいどういう存在者が将来をもちえるのか？特定の遺伝子構成をもった者のみが特定の将来をもつのだろうか。不合理な遺伝子決定論をとらないとすれば、なぜ特定の遺伝子構成が重要なのか。なぜ 46 本の染色体が重要で、卵子のように半分の 23 本しか持っていないものは特定の将来をもっていないと言えるのだろうか。その「将来」とはいったい何か。
6. 一方で、「将来を持つ」ために重要なのは心理的継続性であるとしよう。たしかにわれわれのように一

定の年齢に達し、一定の意識経験をそなえた存在者は将来をもつとってよいように思われるが、初期の胎児はまだ意識経験をもっていない。まだ一度も持ったことのないものを失うことができるのだろうか\*5。マクマハン (McMahan, 2002) は、「我々」とは心をもった存在 (minded being) であって、単に遺伝的に人間である生物 (human animal) ではないと考える。初期の胎児はまだ神経系が発達しておらず、心をもっていないので「我々」ではない。我々と同じであり、特定の将来をもっているということが意味をなすのは、その有機体に心理的な活動とその連続性が確立した時点からである。したがって、初期胎児はまだ「価値ある将来」をもっていない。初期の中絶は殺人よりむしろ避妊に似ていることになる。

7. このように、「ひと」とその同一性をめぐる議論は哲学的に難しい。「ある特定のひとりのひと」であることはどのようなことかという難問を解決する必要がある。80年代のパーフィット以降、フレッド・フェルドマン、ジョン・ブルーム、L. W. サムナーら (Parfit, 1984; Sumner, 1996; Feldman, 1997; Broome, 2004) によって問題が非常に複雑なことが示されており、生命倫理学者たちもすくなくとも、この難問の構造を理解する必要がある。

## 4 まとめ

1. マーキスの議論に対して反論はいくつか可能だが、どれも哲学的・形而上学的な難問を含んでいて決定的なものとは言いがたく、簡単には結論が出せそうにない。
2. プロチョイスの立場に立ちたいと考える研究者はマーキスの議論をなんらかの形で反駁する必要がある。一方、もしマーキスの立場を受け入れるならば、なぜ避妊は不正ではないが中絶は不正であるのかを恣意的ではない形で説明する必要がある。これに失敗すれば、功利主義者たちと同様に「われわれは可能な限り多くの子どもをもつ義務がある」ことを認めざるをえない可能性がある。
3. もちろんマーキスの議論が有効だからといって、ただちに妊娠中絶により厳しい法的な規制を課すべきだということにはならない。国内では法的・制度的な議論と道徳的な議論が混同される傾向があるので注意。現実的・実践的には中絶を厳しく規制することは社会的災厄をもたらす。
4. おそらくマーキスのタイプの議論が可能であることには国内の論者の多くも気づいていたが、マーキスほど明確に説得力ある形で表現することができなかつたように見える。→ 中絶の倫理性に疑問を感じる人々は研究し援用すべき。
5. 中絶容認派はマーキスの議論に反駁する必要がある。しかし可能か？
6. マーキスのタイプの議論 → 人格・生命の同一性に関する形而上学的議論の重要性を理解する必要がある。
7. また、価値と欲求の関係についてのメタ倫理学的研究が進められねばならない。人生は欲求されるから価値があるのか、価値があるから欲求されるのか。
8. 妊娠中絶に関する医学哲学・生命倫理の教育内容は刷新されるべきと思われる。マーキスの議論は今後標準的な議論として真っ先に紹介されるべき価値がある。その後、生命の価値と欲求や快苦との関係、同一性の問題、道徳と法の関係などの哲学的議論へ進むのが哲学・倫理学教育として有益と思われる。

---

\*5

Sinnott-Armstrong (1999); McInerney (1990) を参照。実は同様の論点はすでに Tooley (1983) でも提出されている。

## 参考文献

- Boonin, David (2003) *A Defense of Abortion*: Cambridge University Press.
- Boonin, David and Graham Odie eds. (2005) *What's Wrong?: Applied Ethicists and Their Critics*: Oxford University Press.
- Broome, John (2004) *Weighing Lives*: Oxford University Press.
- Cahn, Steven M. and Peter Markie eds. (2002) *Ethics: History, Theory and Contemporary Issues*: Oxford University Press, 2nd edition.
- Card, Robert F. (2006) "Two Puzzles for Marquiss Conservative View on Abortion," *Bioethics*, Vol. 20, No. 5.
- Feldman, Fred (1997) *Utilitarianism, Hedonism, and Desert*: Cambridge University Press.
- Hursthouse, Rosalind (1990) "Virtue Theory and Abortion," *Philosophy & Public Affairs*, Vol. 20. Reprinted in LaFollette (2002), Timmons (2007).
- Kuhse, Helga and Peter Singer eds. (1999) *Bioethics: An Anthology*: Blackwell.
- (2002) *Unsanctifying Human Life: Essays on Ethics*: Blackwell. (部分訳：ピーター・シンガー、『人命の脱神聖化』, 浅井篤・村上弥生・山内友三郎監訳, 晃洋書房, 2007) .
- LaFollette, Hugh (2002) *Ethics in Practice: An Anthology*: Blackwell, 2nd edition.
- Marquis, Don (1989) "Why Abortion Is Immoral," *The Journal of Philosophy*, Vol. 86, No. 4. Reprinted in Satris (2004).
- McInerney, Peter K. (1990) "Does a Fetus Already Have a Future-Like-Ours?" *Journal of Philosophy*, Vol. 87, No. 5. Reprinted in Boonin and Odie (2005).
- McMahan, Jeff (2002) *The Ethics of Killing: Problems at the Margins of Life*: Oxford University Press.
- Norcross, Alastair (1990) "Killing, Abortion, and Contraception: A Reply to Marquis," *Journal of Philosophy*, Vol. 87, No. 5. Reprinted in Boonin and Odie (2005).
- Parfit, Derek (1984) *Reasons and Persons*: Oxford University Press. (デレク・パーフィット, 『理由と人格：非人格性の倫理へ』, 森村進訳, 勁草書房, 1998) .
- Paske, Gerald H. (1998) "Abortion and the Neo-Natal Right to Life: A Critique of Marquis's Futurist Argument," in *The Abortion Controversy*, 2nd edition. Reprinted in Boonin and Odie (2005).
- Reiman, Jeffrey H. (2001) "Asymmetric Value and Abortion, with a Reply to Don Marquis," in Baird, Robert M. and Stuart E. Rosenbaum eds. *Ethics of Abortion*: Prometheus Books, 3rd edition.
- Satris, Stephen (2004) *Taking Sides: Clashing Views on Controversial Moral Issues*: McGraw-Hill, 9th edition.
- Singer, Peter (1986) *Applied Ethics*, Oxford Readings in Philosophy: Oxford University Press.
- Singer, Peter (1993) *Practical Ethics*: Cambridge University Press, 2nd edition. (ピーター・シンガー, 『実践の倫理』 新版, 山内友三郎・塚崎智監訳, 昭和堂, 1999) .
- Sinnott-Armstrong, Walter (1999) "You Can't Lose What you Ain't Never Had: A Reply to Marquis on Abortion," *Philosophical Studies*, Vol. 96, No. 1.
- Sumner, L. W. (1996) *Welfare, Happiness & Ethics*: Oxford University Press.
- Thomson, Judith Jarvis (1971) "A Defense of Abortion," *Philosophy & Public Affairs*, Vol. 1, No. 1. Reprinted in LaFollette (2002). (ジュディス・ジャーヴィス・トムソン, 「人工妊娠中絶の擁護」として抄訳が加藤・飯田 (1988) に収録されている) .

- Timmons, Mark (2007) *Disputed Moral Issues: A Reader*: Oxford University Press.
- Tooley, Michael (1972) "Abortion and Infanticide," *Philosophy & Public Affairs*, Vol. 2, No. 1. Reprinted in Singer (1986), Kuhse and Singer (1999), Cahn and Markie (2002), Boonin and Odie (2005). マイケル・トゥーリー「*嬰兒は人格を持つか*」として抄訳が加藤・飯田(1988)に収められている。
- (1983) *Abortion and Infanticide*: Oxford University Press.
- Warren, Mary Anne (1973) "The Moral and Legal Status of Abortion," *The Monist*, Vol. 57. Reprinted with revision in LaFollette (2002), Timmons (2007).
- 江口聡(2007)「国内の生命倫理学における「パーソン論」の受容」、『現代社会研究』, 第10巻.
- 樫則章(2006)「人工妊娠中絶」, 伊勢田哲治・樫則章(編)『生命倫理学と功利主義』, ナカニシヤ出版.
- 加藤尚武・飯田亘之(1988)『バイオエシックスの基礎』, 東海大学出版会.
- 中澤努(2001)「ハーストハウス「徳の理論と人工妊娠中絶」」, 『現代倫理学論集』. 北海道大学大学院文学研究科哲学倫理学研究室.